

放射線看護

——すべての看護職者が学ぶべきもの——

All nurses need for radiological nursing on the daily practice

浦田 秀子

Hideko URATA

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科

Nagasaki University Graduate School of Biomedical Sciences

「看護師と放射線との関わりは、自らも被爆しながら被災者をケアした広島長崎の看護師に始まります。」と日本放射線看護学会のホームページにあるように、久松シソノ氏はじめ多くの先輩諸姉は光とともに一瞬にして倒壊し、炎となり、阿鼻叫喚の巷と化した原子野に立ち続け、救護活動を行いました。長崎にとって最も大切な記憶は1945年8月9日の原子爆弾による被災です。市民およそ7万人、長崎大学の前身、長崎医科大学の教職員、学生約900名の尊い命が奪われました。その中で看護師は51名、看護学生は58名でした。

久松シソノ氏は永井 隆博士とともに被災直後より、負傷者への応急処置、永井先生を隊長とする救護隊で活動されました¹⁾。その功績により2005年、フローレンス・ナイチンゲール記章を受賞されました。

第2回の学術集会(2013年9月)では、宮崎トミホ氏にプロローグで「自らも被爆しながら救護活動をした看護師の語り」²⁾としてお話していただきました。宮崎氏は投下直後、外科病棟の主任として患者の看護、その後は調来助教授を隊長とする救護隊で活動されました。

私は1階の看護室で書類の整理をされていて背中に何かに打たれ、「うっ」と息がつまり、しばらく気を失っていた。気がつくと廊下の窓際につかまっていた。やっと地下室にたどり着いたら収容していた患者は全員無事で「あー」と言って手を握り合った。A看護師はおなかの上に梁が落ちてきて治療室で亡くなっていた。患者の顔を見たら、髪も煤で汚れ逆立っていた。洗濯室の蛇口を捻ると水が出たので、口を漱ぎ、バケツに水を汲み、タオルを湿らして患者の顔を拭いた。私の背中の傷は翌朝には血が止まったが、胸が痛くて呼吸をするときつかった(肋骨骨折とガラス破片創)。

「壊滅的な被害を受け、仲間を亡くし、絶対的なマンパワー不足・医療器材不足の状態、看護を続けなければとその使命感に動かされ、わが身も顧みず働き続けた。看護は被災現場すべて焼失して何もないところでも、どこでもできる。そして必要としている患者がいる限りどこでもしなければならぬ。被災現場で何もなくても感染予防とか、栄養のバランスとか、清潔不潔の管理ができる。薬もなく医療機械もなく治療ができなくても看護(みまもる)ことができる。」³⁾と当時の活動を語られ、長崎大学の記憶として看護の歴史をつないでくださいました。宮崎トミホ氏は2017年5月にお亡くなりになりました(享年91歳)。

被災者のケアから始まった放射線看護ですが、現代の医療において放射線利用は欠かせないものであり、多くの看護職者は日々、放射線診療を受ける対象者と関わっています。したがって、すべての看護職は放射線看護に関する基本的な知識・技術は必要です。しかし、看護基礎教育において放射線や放射線被ばくに関する教育内容は絶対的に不足し、卒後教育においても系統的な教育はなされておらず、そのことは、2011年3月の東京電力福島第一原子力発電所事故発生時に露呈しました。医療職を含め住民は放射線、放射線の健康影響・リスクへの不安・恐怖で大パニックをきたしました。放射線被ばくや健康影響に関する知識の重要性を痛感し、専門的知識を有する人材育成が喫緊の課題となりました。

本学会の設立の経緯は学会誌第5巻の巻頭言で弘前大学の西沢義子氏が述べられています⁴⁾。長崎大学、弘前大学、鹿児島大学の大学院で放射線看護の専門家育成のためのコースを、専門看護師「放射線看護」として分野を特定するためには、学術的基盤として学会が必要でした。放射線看護の必要性を認識されている看護学および医学関連学会の多くの方にご支援をいただき、専門分野として特定されました。そして、3大学ともに放射線看護の高度実践看護師教育課程（専門看護師）として認定され、2017年4月から教育を開始しました。専門分野としてエビデンスに基づいた実践を深めながら理論を生成し、放射線看護の専門分野として「放射線看護学」を確立しなければなりません。

放射線看護は大きくは「医用放射線利用に伴う看護」と「被ばく医療における看護」の2つの領域であり、ともに被ばくのケアの低減、防止が共通点であることから、放射線防護が学術的基盤と考えます。草間理事長は「放射線看護学」は「放射線防護学」と「看護学」を融合させた学際的な学問であると述べられています⁵⁾。被災者ケアはまさしくこの実践でした。早期の除染、離れた地への避難、感染予防、栄養管理、清潔管理、そしてあたたかく看護る（みまもる）ことです。

2012年5月に設立した日本放射線看護学会は2018年4月1日をもって任意団体から一般社団法人に移行する準備を進めてまいりました。学会誌第6巻が発行されるころには法人格をもった学会となっていることを確信しています。

第7回の学術集会は長崎で開催し、メインテーマを「つなぐ つむぐ おりなす 放射線看護学～すべての看護職者の学びの集積から～」としました。放射線看護分野が高度実践看護師教育課程（専門看護師）として認定されたことは、学術的基盤づくりとしての本学会が果たした大きな成果です。今後も学術集会の開催および学会誌の継続的な発行はきわめて重要です。さらにエビデンスを蓄積し、「放射線看護学」の確立を目指して、会員一丸となって日々精進してまいりましょう。

引用文献

- 1) 長崎医科大学附属病院看護婦原爆被爆者体験編集委員会. 夾竹桃よ永遠に：原子爆弾犠牲者の霊に捧ぐ. 長崎医科大学附属病院看護婦原爆被爆者体験編集委員会, 1990.
- 2) 宮崎トミホ. 自らも被爆しながら救護活動をした看護師の語り. 日本放射線看護学会誌. 2014, 2(1). 50-51.
- 3) 公益社団法人長崎県看護協会看護の継承委員会. 伝えたい! 災害看護. 公益社団法人長崎県看護協会, 長崎, 2013.
- 4) 西沢義子. 日本放射線看護学会誌第5巻発行にあたって：ともに歩んだ5年間の軌跡. 日本放射線看護学会誌. 2016, 5(1). 1-2.
- 5) 草間朋子. 放射線看護学の確立を目指して. 日本放射線看護学会誌. 2014, 3(1). 1.